

スポーツの「場」を共有する障害者と 健常者の関係性の検討:

ソーシャルサポートからみた視覚障害者ランナーと伴走者

日野 未奈子

本研究は、個人を囲む他者との相互作用に関連する要因として有形無形の援助を示すソーシャルサポートを「個人を取り巻く重要な他者（家族、友人、同僚、専門家など）から得られる有形・無形の援助（菅ら，2011）」と定義し、心理的安寧に働く「情緒的サポート」の提供と受領の観点からスポーツの「場」を共有する視覚障害者ランナーと伴走者の関係性の現状と課題を明らかにし、基礎資料を得ることを目的とした。

詳細を把握するための枠組みとして、①視覚障害者ランナーが知覚するソーシャルサポートの（視覚障害者ランナーの互惠性）、②伴走者が知覚するソーシャルサポート（伴走者の互惠性）、③視覚障害者ランナーと伴走者が授受する個人間におけるソーシャルサポートの実際（視覚障害者ランナーと伴走者の衡平性）を比較した。

調査は、2018年10月21日に開催された「第21回全国視覚障がい者駅伝大会」に参加する、視覚障害者ランナー及び伴走者を対象に質問紙にて実施した。内容は、(1) 個人的属性（性別、年代）、(2) 障害の程度（視力、視野、伴走者の有無）、(3) ランニング状況（ランニング歴、ランニング頻度、フルマラソン経験の有無）、(4) 伴走状況（伴走歴、伴走頻度、特定のパートナーの有無）を尋ねた。ソーシャルサポートの互惠性を明らかにするための項目としては、「賞賛（落ち込んでいるときの元気づけ）」、「励まし（不安になっているときの励まし）」、「評価（尊重・評価）」、「アドバイス（問題解決のためのアドバイス）」を援用した（4項目それぞれの提供と受領を設けてそれぞれ5点リカート方式で尋ねた）。視覚障害者ランナー及び伴走者それぞれのソーシャルサポートの提供と受領の度合いを比較するため、対応のある t 検定を用いた。また、(1) 属性、(2) 障害の程度、(3) ランニング状況、(4) 伴走状況においては質問項目ごとに提供状

況と受領状況の平均値を算出し、関連する2群間で比較した。ランニングの活動満足度への関連要因を検討するためには、活動満足度を従属変数に、ソーシャルサポートの授受状況を独立変数にステップワイズ法による重回帰分析を行った。視覚障害者ランナーと伴走者が授受する個人間におけるソーシャルサポートの実際には、両者の関係性による特徴について、それぞれ中央値を算出し、高群と低群の2群間で比較した。各分析における統計的有意水準は5%とした。解析に当たってはSPSSを用いた。視覚障害者ランナー140名、伴走者116名の対象者からそれぞれ48名(回収率34.3%)、65名(回収率56.0%)の回答を得た(ただし、質問項目により回答数は異なる)。その結果、以下のよう示唆を得た。

1) 視覚障害者ランナーが知覚するソーシャルサポート(視覚障害者ランナーの互恵性)

視覚障害者ランナーが伴走者とランニングを行う際には、まずパートナー交渉や自己紹介などが行われる。ストレスフルな状況の一つに、初対面の人と出会うような状況が挙げられる(加藤, 2007)。したがって、特定の伴走者を有さない視覚障害者ランナーは、毎回対人的なストレスを感じていると予想する。このことから視覚障害者ランナーが知覚するソーシャルサポートは、特定の伴走者が存在しない場合、ソーシャルサポートの提供状況が受領状況を下回る(過剰利得知覚)状態にあるとの仮説を持った。

結果は、特定の伴走者の有無によるソーシャルサポートの授受状況に統計的有意差が認められなかった。よって、仮説は支持されなかった。特定の伴走者の有無に関わらず、視覚障害者ランナーは、伴走者に対してサポートを提供するよりも受領する意識が高い傾向にあった。しかしながら、フルマラソンの経験のある視覚障害者ランナーは、経験の無いランナーよりも伴走者から与えられる「評価」の受領が低く、伴走者にランナーとして評価されていないと感じていた。また、ランニング歴が11年以上のランナーは、11年未満のランナーよりも、伴走者からの「アドバイス」の受領が低い結果となった。以上より著者の仮説が支持されなかった背景を考察するならば、レース経験が浅い視覚障害者ランナーは、伴走者に頼ることが多く、専門的なアドバイスを多く求める傾向にある。したがって伴走者からの受領が高くなる。その一方で、ランニングキャリアの高い視覚障害者ランナーは、伴走者からの評価やアドバイスの受領が低く、競技中の伴走者をそれほど意識していない。このことは、木村(2012)の報告において、視覚障害者が取りたてて介助者との関係に触れていない報告につながっているように考えられた。つまり、ランニングキャリアの高い視覚障害者ランナーにとっての伴走者は、サポート

される特別な存在ではなく、自然な存在になっていると思われた。本研究では、視覚障害者ランナーのランニングキャリアによって、ソーシャルサポートの感じ方が変わっていく様子が伺えた。

2) 伴走者が知覚するソーシャルサポート（伴走者の互恵性）

伴走者は、同等の立場にあるパートナーとしての役割に加えて、コーチの役割を持つようになる（伊藤，2016）。さらに、ランニング歴の長い伴走者は、視覚障害者ランナーに対して指示的行動を行うようになる（日野，2018）。したがって、ランニング歴の長い伴走者は視覚障害者ランナーに提供するサポート量が多い故に、負担感を抱くと予想する。ランニング歴の長い伴走者が知覚するソーシャルサポートは、提供状況が受領状況を上回る（過少利得知覚）状態にあるとの仮説を持った。

結果は、本研究ではランニング歴の長い伴走者は提供状況が受領状況を上回る（過少利得知覚）状態にあることを予想したが、その仮説は支持されなかった。今回の調査では、伴走者のランニング歴の平均が 17 年と総じて長かったため、長期群、短期群の 2 群間比較ではソーシャルサポートの授受に特徴がみられない様子であった。しかし、ランニング頻度の高い伴走者（週 2～3 日以上）は、視覚障害者ランナーへ「賞賛」と「アドバイス」を提供する傾向にあった。提供状況が受領状況を上回る（過少利得知覚）状態は、ランニング歴よりもランニング頻度の違いに顕著であった。加えて、伴走者の活動満足には、「評価」の提供が関わっていた。伴走者の視覚障害者ランナーに対する指示的行動は、伴走活動の負担感ではなく、やりがいにつながっている様子が伺えた。

3) 視覚障害者ランナーと伴走者が授受する個人間におけるソーシャルサポートの実際

（視覚障害者ランナーと伴走者の衡平性）

①視覚障害者ランナーの提供状況の平均値と、伴走者の受領状況の平均値の比較、②伴走者の提供状況の平均値と、視覚障害者ランナーの受領状況の平均値の比較を行った。加えて、日野ら（2018）の報告で特定のパートナーの重要性が指摘されていることから、③特定のパートナーを有する視覚障害者ランナーと伴走者のソーシャルサポートの授受状況の平均値の比較、④特定のパートナーを有さない視覚障害者ランナーと伴走者のソーシャルサポートの授受状況の平均値の比較を行った。また、片受・庄司（2000）の衡平理論では、ソーシャルサポートの提供と受領の差が少なくバランスがとれている場合には、公正感が生じ精神的健康は維持されているとしている。このことから、特定の

パートナーを有する者同士のソーシャルサポートの授受状況の差は少ない（衡平状態）との仮説を持った。

4つの枠組みから関連要因を検討した結果、①～③は統計的有意差を認めず、④の特定のパートナーを有さない視覚障害者ランナーが提供し、伴走者が受領する「評価」の1項目のみに統計的有意差がみられた。視覚障害者ランナーが提供する「評価」を伴走者は低く受け取っていることが明らかになった。特定のパートナーを有する視覚障害者ランナーと伴走者のソーシャルサポートの授受は統計的有意差を認めていないことから、特定のパートナーを有する視覚障害者ランナーと伴走者のソーシャルサポートの授受状況の差は少ないという仮説は支持された。結果から、特定のパートナーを持つ視覚障害者ランナーと伴走者は精神的に安定的な関係にあるようにとらえられたが、特定のパートナーを有さない視覚障害者ランナーと伴走者は、片受・庄司（2000）が示す不衡平状態の傾向にあることが示唆された。視覚障害者ランナーや伴走者が初めてランニングを行う際には、特定のパートナーが存在しない場合が多い。当初は不衡平状態傾向にある視覚障害者ランナーと伴走者は共に活動することにより衡平状態に繋がる可能性が高い。